様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２４８１

研究課題名（和文）1930年代のプロレタリア文学―階級、人種、ジェンダーの視点から

研究課題名（英文）Proletarian Literature in the 1930s from the view pint of class, race, and gender

研究代表者
齋藤　博次（Saito, Hirotsugu）

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：９０１８０８０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカでは、1929年の大恐慌以降、共産主義運動が急速に高まった。それに伴い、左翼系の雑誌が創刊され、労働者の階級意識を高め、社会革命と芸術表現を結びつける文学運動が進んでいった。プロレタリア小説の勃興は、文学と政治との関係について二つの問題を提起した。一つは、文学の政治的有効性をめぐる問題である。この問題をめぐって雑誌Partisan Reviewはプロレタリア文学と決別し、モダニズム文学擁護へと向かった。プロレタリア小説が提起したもう一つの問題は、階級という概念と人種やジェンダーをめぐる問題である。本研究は、この3つの要素に着目して、プロレタリア小説の独自性と複雑さを分析したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
プロレタリア小説を階級という観点からとらえるのではなく、人種やジェンダー、さらにはセクシュアリティといった観点から捉え直すことにより、プロレタリア小説が共産主義運動を推進する単なる「道具」でもないし、階級意識を反映した小説でもないこと、そして独自の様式と複雑なテーマが織り込まれていることを明らかにした。また、プロレタリア小説を論じる場合は、旧来のリアリズム小説の規範からアプローチするのではなく、異なる美学に依拠する必要があることを提案した。

研究成果の概要（英文）：In America, after the onset of the Great Depression of 1929, the Communist movement developed dramatically. Newly published left-wing journals such as New Masses, The Liberator, and Partisan Review tried to inspire the lower-class workers to awaken to the class-based social structure by developing proletarian literature that could promote social revolution.
The rise of proletarian literature raised two issues. The first issue was about the political usability of literature. William Phillips and Philip Rahv, for instance, denied the priority of politics over literature, starting in the late 1930s to advocate modernist literature of Europe. Another issue raised by the proletarian literature movement was about the relationships of class, race, and gender. I analyzed a number of proletarian novels to examine their originality and clarify complicated relationships of class, race, and gender described in them.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：プロレタリア文学　ジェンダー　人種　階級

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

（１）アメリカのプロレタリア文学に関する研究は、プロレタリア文学自体が 1930 年代以降の共産主義運動の勃興を背景にして登場してきたため、階級を基軸にして文学作品を論じる傾向が強かった。しかしながら、下層階級の労働者の多くは人種的マイノリティでもあったため、プロレタリア小説においては、階級の問題と人種・民族の問題は重層的に表現されている。また、２０世紀初頭において女性が社会的に被った抑圧を考慮するなら、プロレタリア小説研究においてもジェンダーの問題を扱う必要がある。階級のみならず、人種やジェンダーの問題を絡めて研究することが日本ではあまり行われていなかった。

（２）1930 年代のプロレタリア文学をめぐる論争の中で、モダニズム文学を文学の規範（キャノン）とする見方が一般的になった。こうした見方は今でも文学史の「常識」になっている。プロレタリア小説を多様な観点から分析することで、その文学的特質と意義を再考することが必要であった。

２．研究の目的

（１）上記の「研究開始当初の背景」で説明したように、プロレタリア小説を階級・人種・ジェンダーの観点から再読し、その独自な様式と複雑さを明らかにすることが主な研究目的である。

（２）社会的に抑圧されてきた人種・民族の中で、特にユダヤ人と黒人との関係に着目し、両者の愛憎共存的な関係を明らかにすることも研究目的の一つである。

３．研究の方法

文学研究は、特定の視点を設定して、作品を具体的に論じることに意義がある。本研究では、プロレタリア小説の特質と問題点を具体的に解明するとともに、被抑圧集団であるユダヤ人と黒人との人種・民族的対立について考察した。

（１）プロレタリア小説におけるジェンダーやセクシュアリティの問題を考察するために、Agnes Smedley の *Daughter of Earth* をとり上げ、主人公の Marie の中に、社会改革への意欲、貧困への反感、女性の自立性への欲求、性的自由への憧れといった様々な感情が相克していることを分析した。

（２）Jack Conroy の *The Disinherited* を対象にして、この小説が 1920 年代～30 年代の労働者階級の実態を描きつつ、主人公の Larry Donovan が階級意識に目覚める過程を描いた典型的なプロらタリア小説でありながら、旧来の「リアリズム小説」とは異なる美学で書かれていることを解明した。

（３）黒人とユダヤ人が同じ社会的被抑圧集団であるにも関わらず、社会的連帯には至らず、相互に確執を深める様を Bernard Malamud の *The Tenants* を題材にして探った。

４．研究成果

（１）Agnes Smedley の *Daughter of Earth* は、1890 年代後半から 1920 年代後半にいたるアメリカ社会を背景にして、貧困家庭で育った Marie Rogers の半生を描いた小説である。Marie は小説の冒頭で自分の半生を顧みて、「わたしは、美しさのために死ぬことができない人間である。わたしは別の大義のために死ぬ人間、貧困に打ちひしがれ、富と権力の犠牲になった人々、偉大なる大義のために戦う類の人間である」と語っている。しかしながら、Marie の実際の人生を辿ってみると、Marie は「偉大なる大義のために戦う」女性であると同時に、さまざまな恐怖と欲望をその身体に潜ませている女性でもある。貧困に対する恐怖感、貧困階級から脱しようとする欲望、貧困階級を裏切ることへの罪悪感、女性としての自立を求める欲求、性生活を伴わない結婚をしたいとする願望、性的な欲求に対する罪悪感と性的抑圧を行っている自己へのいら立ち。こうした感情が Marie の心の中で混在し、最終的に Marie は狂気の一歩手前まで追い詰められていく。Barbara Foley は、Marie の中に教養小説における悲劇のヒロイン象を読み取っているが、Marie を特徴づけているのは、自らの意識（あるいは無意識）の中に混在している統御不能の恐怖や欲望や罪悪感であることを指摘した。

（2）Jack Conroy の *The Disinherited* は、炭鉱労働者の家に生まれてさまざまな過酷な労働に従事する主人公 Larry Donovan の生活を通して、1920 年代から 1930 年代の下層労働者の実態を暴いた小説である。Mike Gold の *Jews without Money* と並んでプロレタリアート小説の先駆けと目される作品であり、炭鉱労働、鉄道建設、製鉄、ゴム靴製造、道路工事の労働の実態が生々しく描かれている。Larry が様々な肉体労働に携わりながら、階級意識に目覚め、最終的に共産主義運動の指導者として生きていくことを選ぶ筋立てになっており、プロレタリア小説の規範を踏襲している。この作品には肯定的な評価が多く寄せられたが、そのいっぽうで、この作品が「伝統的な小説基準」から外れていること、「物語の具体的なまとまり」がないこと、「主人公の性格（特に感情）が十分描かれていない」といった理由から批判されることもあった。本研究では、この作品をブルジョア社会が生み出してきたリアリズム小説の規範に則った小説ではなく、Granville Hicks が唱導した、「ブルジョア的美学」に挑戦した作品（Hicks はこれを collective novel と呼んでいる）と捉え、この物語の独自な形式と手法を分析した。

（3）Bernard Malamud の *The Tenants* を対象にして、同じ被抑圧集団でありながら反発しあうユダヤ人と黒人の対立に対して、Malamud がどのようなメッセージを伝えようとしたのかについて、この小説の「結末」に着目して論じた。主要登場人物である Lesser（ユダヤ人作家）と Spearmint（黒人作家）は、相互に和解することを望みながら、次第に対立を深めていく。この対立に関して、Malamud は作品の中で複数の「結末」を用意している。異なる「結末」を用意したのは、人種対立という厄介な問題については、一義的な「結末」を設けるのではなく、複数の「結末」を描くことによって、和解の可能性と和解の難しさを示唆する意図がマラマッドにあったからである。同じ人間である以上、体験の相違はあっても人間は相互に理解しあえるという Lesser の「普遍主義」的考え方には、Malamud 自身の考えが反映されている。だが、同時に Malamud は、Lesser の芸術至上主義的な生き方の負の部分を描くことで、Lesser の理念を相対化して読者に伝えようとする。いっぽう、Malamud は、Spearmint が自らの黒人性に拘泥するあまり、他者への理解を欠いた人物であることを示すことで、黒人優越主義者の限界を示唆する。幻想と現実が入り混じる小説を「結末」の複数性に着目して考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>齋藤博次 | ４．巻<br>- |
| ２．論文標題<br>The Tenants(1971)における「結末」の意味 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>欧米言語文化論集Ⅲ | ６．最初と最後の頁<br>77-90 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>齋藤博次 | ４．巻<br>- |
| ２．論文標題<br>引き裂かれた自己：アグネス・スメドレーの『大地の娘』について | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>エスニシティと物語り | ６．最初と最後の頁<br>224－234 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>齋藤博次 |
| ２．発表標題<br>Jack　ConroyのThe Disinheritedにおけるリアリティとリアリズムの相克 |
| ３．学会等名<br>日本アメリカ文学会東北支部 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>齋藤博次 |
| ２．発表標題<br>The Tenantsにおける人種・民族の対立 |
| ３．学会等名<br>日本アメリカ文学会東北支部 |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|